

令和七年春号（2025年）

第542号

あたらしい道



【根を肥やす】

お前さん達

日本人ならば

根を肥やすんです

ふが本当です

松本草恒女史語録

あたらしい道

令和七年 春 542号

目次

テーマ「根を肥やす」

ことのは

「根を肥やす」

..... 1

随想

【明治の義】.....と

大阪 森田 茂

..... 5

日本の国柄

万葉集

編集部

..... 9

リバイバル
月刊誌

手塩にかけて育てられ
「合力」と「絆」

埼玉(故)森 芳昭
東京(故)佐藤 宗三

..... 13
..... 16



この道
とおる

或るクレーム

埼玉(故)山本紘治
……………18

日本の人柄

頼山陽

東京 関塚禎人
静岡 内藤吉隆
……………21

大和撫子

戦国の女城主 立花闇千代

神奈川 芹澤和彦
……………25

寄稿

あたらしい道の目標は
「世直り・国替え」

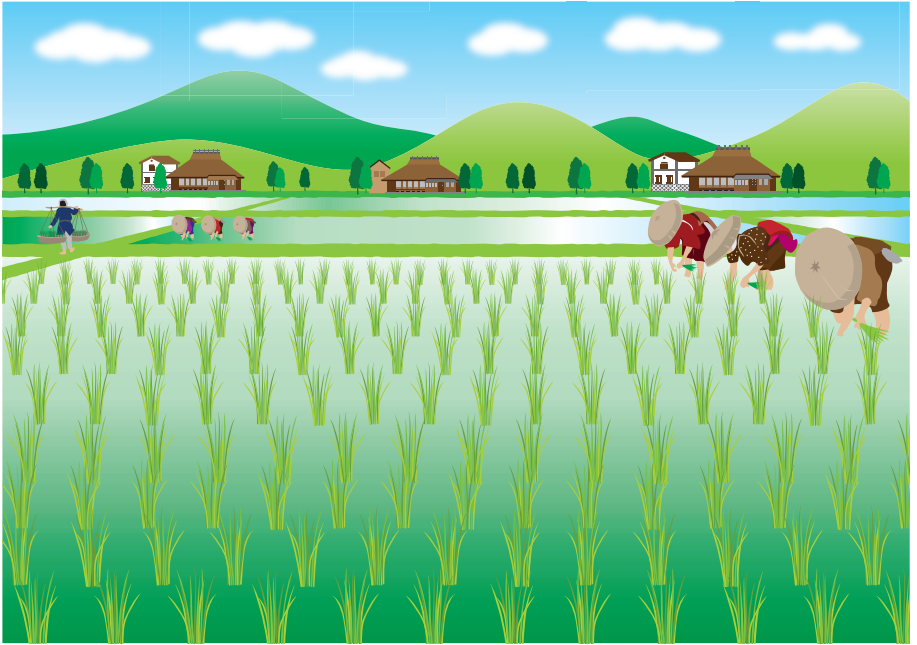
埼玉 市野道明
……………33

連載

羽曳野物語(四)

柳田 節
……………39

(表紙題字 松本草垣女史御親筆 とびら書 松下賀奈子さん)



田植え

ことは

「根を肥やす」

日本人ならば根を肥やす

日本の国を あれやらこれやら

思い浮かべるだろう

それによつて 自分達の根が肥えるんです

身の内にな 根が有るだろう

その根が肥える それが本当

お前さん達 日本人ならば

根を肥やすんです これが本当です

根が肥えてどんな世でも平気

根を肥やす もう分かったな

根が肥えて なか／＼ですよ

どういふ場合でも 平気で通り越す

道のお方 そうなるだろう

（松本草垣女史語録より抄）

【ご垂示】

日本根の国底の国

K様 昨晩のご垂示に、日本人でありながら日本がいやになる人が多く出る〴〵と伺いましたが、確かに愛国心が薄れて、日本は愛するに値しない国だという考えが強くなって、日本を嫌がる人が、若い人とか左翼陣営の人々の間に拡がりました。

これは、戦後の教育、特に歴史教育がそうさせたのであり、現在の日本だけを見て、日本の本質、伝統を見ていない所にその原因があるかと思っています。

わきま この道で教えて戴く〴〵日本根の国底の国〴〵ということをしつかり辨えないと、日本の本当の良さは分からない。その教えが徹底すると、日本を嫌いになる人も無くなると思います。その意味からも、この道の〴〵日本根の国底の国〴〵という教えは、非常に有難いと思います。

根を知る必要がある

K様、本当にいい事をおっしゃって下さいました。本当に〴〵根の

国〴〵だということを、今の世間の方は、大部分ご存じありませんわね。もう根なんですからね、

これからね、まだ底がね、底の底がね、幾らでもね、〴〵ああやっぱり有難い国だったんだ〴〵と分かるんですよ、ね。

ところが、根を知りませんからね、

もう今のところ、うるさい世相ですからね、

もう日本が（或いは世の中が）嫌になっちゃったっていう方が段々増えるんですよ、ね。皆さんね、〴〵根とはねえ〴〵っていう事を、一つご自分を掘り、又人さんとも語り合ってますね、色んな角度で、一つね、お分かりになって下さいませ。

（昭和四十九年十月十八日）

有難い日本に還そう

こんな時代に誰がした

段々〴〵 世の中で 一人々々が
領^{うなず}くらしい

〴〵世の中を 見てはいられない〴〵
こういう風に思うだろう

日本は根の国だから元に還そう

こういう時代に お互いさん同志

やれく 大した事ですな

これでは大変 これでは駄目

日本の国は どう仕様もないんです

元に還る 元があります

さあくくく 根の国です

そうだく 根の国だから 元に還そうえ

何とかして素晴らしい日本に

皆んなさんよ 建替えましょう

さあ分かった どんくくく

元の日本を さあ分かった……

よくく この道の理を 肚に納めて

何とかまあ 素晴らしいく日本に

何とかしてや

（昭和五十二年十月十二日）

随想

【明治の義】…………と

大阪 森田 茂

私の父は明治生まれ。

農林省の国家公務員として、寒冷地に強い稲作の研究に従事していました。

終戦前、北朝鮮とソビエトの国境付近に、転勤を命じられました。

父と母、三歳になる私の姉との三人で、勤務地へ赴任しました。

時は終戦前三〜四年前。

父は、現地の若者を集め、コメ作りを指導しました。

冬は寒く凍土です。

真冬に、水にぬらしたタオルを、2分も振り回すと、カチコチに凍るような場所です。

春になり、雪解けを待つて、地面を掘り起こします。そこから種をまくのです。

父は、明治生まれですから、言葉より先に手が出るような人でした。

毎日毎日、現地の若者に、スパルタ教育を行いました。

毎朝、朝礼をするのですが、ある朝、現地の若者を集め、言いました。

「お前たちは、毎日毎日、俺に殴られて辛いかな？ 憎いか？ 俺をどんなに憎んでも構わない」

「これからの、朝鮮という国の米を作るのは、お前たちしかいないのだ」

「歯を食いしばってでも、米の作り方を覚えろ」

そう、話したそうです。

この話は、父が亡くなってから、母から聞いた話です。

母にこの話を聞いたとき、母に尋ねました。

「その当時のお父さんは、何歳だった?」「そうね、三十代半ばくらいだったね」

驚きました。

当時の朝鮮という国は、日本の植民地でした。現地の若者に米を作らせ、日本の食料とするのが当面の目的でした。

当時の父は何故、このような事を言えたのだろうか?

国境や民族、宗教、肌の色……を超えて、「私たちの国の米は、お前たちが作るんだ」と。

憲兵に聞かれたら、「国賊」になりかねないことを言ったのです。

そして、終戦を迎えました。

当時の日本人町の全員が、捕虜となり収容所に入られました。

女性は髪を切り、顔には炭を塗り、男性の服を着て、女性であることを隠しました。

しかし、学校の教師とか警察官が、自分が助かりたい一心で、ロシア兵に告げ口をしました。

名指しをされた女性は、ロシア兵に連れて行かれ、二度と戻ってくることはありませんでした。

ある凍てついた夜、父、母、姉の三人が薄い毛布一枚にくるまって、眠れぬ夜を過ごしていた時に、誰かが父の肩をゆすつたのです。

暗がりで見えなくなり、そこにはスパルタ教育をした、朝鮮の若者が二、三人立っていました。

彼らは小声で、

「先生たち家族だけは、どんなことがあっても、この収容所から逃がしてあげる」

そう言って、大きな握り飯を差し入れてくれました。

それから、父たちはその収容所を逃げ出して、三十八度線を目指しました。

色んな収容所から、同じように逃げ出した日本人たちが、少しずつ合流し、昼間は山中に隠れて、(姿が見つかりと銃撃される)夜間のみの逃避行となった。

中には、乳飲み子を抱えた、若い母親もいたそうです。

ある時、その母親が夜暗くなつてから、静かに

父たちグループから抜け出し、戻ってきたときは、抱えていた乳飲み子を抱えていなかったそうです。夜間とはいえども、空腹の赤ん坊の泣き声は標的になるから、母親は自分の子供の命を絶つたのでした。そして、孫、母親は結局、三十八度線は越えられませんでした。

途中、前日の雨で水かさが増えた川に出ました。五歳くらいの子が、一人で川の手前で泣いていました。

父がどうしたのか尋ねると、親はその子どもを見捨てて川を渡った、といいました。

父は、「そうか」と一言だけ言つて、ロープでその男の子を背負い、姉を抱きしめて、川を渡りました。

言葉にできない程の、壮絶な逃避行を乗り切つて、佐世保港にたどり着いたとき、たくさんの戦争孤児が集められている施設に、その男の子を預けて、別れたそうです。

名前も聞かず、父も名乗らず、そのままの別れとなりました。

当時の話は、父が亡くなってから、母から聞きました。

「どうして、父は名前も知らない男の子を連れ帰つたのだろう?」

「極限状態の中で、何故、父はその子を背負つたのだろう?」

最近になって、この出来事を改めて考えるようになりました。

きつと父親は、「この幼い子供の命を、この見知らぬ土地で死なせるわけにはいかない」

その、やむにやめん気持ちだが、父を動かしたのだらうと思つたのです。

我々日本人は、今の時代、「外国式にかぶれている」とか、「戦後の教育で骨抜きにされた」と、よく耳にします。

本当にそうでしょうか??

父の行動や思いは、まさしく、「義」そのものだつたと思うのです。

そして、今生きている私たちは、父たち、明治の日本人から受け継いだ「義」を、亡くしたので

はなく、忘れているのだと……。

この身体の中に、確実に「義」は、受け継がれているのだ、と……。

私が、あたらしい道につながって、父を思うとき、この忘れていた「義」を、思い出させてくれたんだと思います。

今の世相は考えられないほど、殺伐としています。

顔を見たこともない者が、出会ってすぐに犯罪をおかす。

そんな、出鱈目な日本にしてしまった責任は、我々にあるのです。

なんの責任か……？

「義」を見失ってしまった責任が、あると思います。

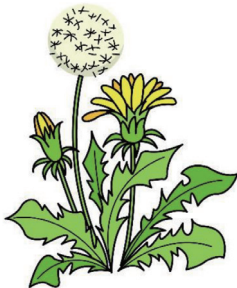
それと同時に、「恥」もまた、見失ったものの一つだと思っています。

戦後の日本人は、経済成長という名のもとに、世界中で一番、「義」と「恥」を重んじていたはずの

精神を、忘れてしまったのです。

もう一度、明治の父たちが、しっかりと持っていた「義」……。

それを、自分の中に見出すことが、責任を果たすことだ、と思うのです。



万葉集

編集部

★日本文化としての『万葉集』

まんようしゅう

万葉集は、日本に現存する最古の和歌集で、奈良時代（八世紀）に成立したものとされています。全二十巻からなり、約四千五百首の和歌が収められ、日本語の初期の形である「万葉仮名」を用いて書かれています。古代日本の人々の感情や風景、生活、愛情、友情、自然への感謝などが詠まれています。

古代からの日本の文化を知る上で、貴重な資料となっております。

★万葉集の特徴

万葉集の特徴としては、以下の点が挙げられます。

一・自然への賛美

万葉集には、自然を称賛する歌が多く見られます。例えば、やまべのあかひと山部赤人の歌があります。

春の野に すみれ摘みにと 来し我ぞ

野をなつかしみ 一夜寝にける

（春の野にすみれを摘もうと来た私だが、美しい野辺の様子に心をひかれて、一晚を野で過ごしてしまった）

この歌では、春の野に咲くすみれを摘みに行く情景が描かれています。自然と人間の関係を大切にする姿勢は、日本文化において重要な要素です。このように、万葉集は自然との調和を重視する感性を育んできました。

二、愛の表現

万葉集の中には、恋愛に関する歌も多く含まれています。例えば、有名な相聞歌として以下のものがあります。ぬかたのおきみ額田王の歌です。

あかねさす 紫野行き 標野行き

野守は見ずや 君が袖ふる

（あかね色をおびる、紫草を栽培している野を行き、御料地の野に行つて、野の番人は見ているのではないのでしょうか。あなたが袖をお振りになるのを）

これに答えて、おおあまのみこ大海人皇子が詠んだ歌です。

紫草の にほへる妹を 憎くあらば

人妻ゆゑに われ恋ひめやも

（紫草のように美しいあなたを憎いと思うのであれば、人妻なのにどうして恋しく思うことがあるう）

これら二つの歌には、成立する背景があります。つまり、これらの歌が詠まれたのは、遊獵の後の宴

会の席上でのこと、額田王の問いかけの歌に、大海人皇子が答えた歌です。

実は、額田王は、大海人皇子の兄である天智天皇の妃となつた人です。そのような周知の關係が問答の背景にあります。ストレートでおおらかな愛の歌と言えます。

また、子供への愛を歌つた歌もあり、やまのうえのおくら山上憶良の歌に有名な歌があります。

銀も 金も玉も何せむに

優れる宝 子にしかめやも

（しろかねもこがねもたまとても、いかに貴いものであらうとも、子供という宝に比べたら、何のことがあらう）

の意味ですが、子どもの大切さを力を込めて歌い上げています。

愛情の肯定的な面ばかりではなく、自分の意志だけではない、親の本能的な愛情を含む、相反す

る複雑な肉親の情も含まれています。普遍的な愛を歌いながらも、人の心理の複雑さをも歌に取り入れている、このようなところに、山上憶良の歌の特徴があるといえます。

(HP 「短歌のこと」より)

三. 歴史と文化の記録

万葉集は、当時の社会や風俗、価値観を知る貴重な資料でもあります。例えば、以下の歌があります。

秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ

我が衣手は 露にぬれつつ

(秋の田のほとりにある仮小屋は、屋根の苦の編み目が粗くて、私の袖が夜露に濡れている)

〈註 正確には、この歌は万葉集の歌ではありません。この歌の原型が、詠み人知らずで万葉集に載っています。その原文は「秋田刈る仮廬を作り我が居れば衣手寒く露を置きにける」です。ここに掲げた歌は、のちに百人一首で庶民を思いやる天智天皇の歌として伝わったと考えられ

ているポピュラーなものです〉

この歌では、秋の田んぼの風景を背景に、自然の美しさと人間の生活が交錯しています。自然と人間の関係を深く考察する姿勢が見られます。

また、このような歌を通して、古代日本の農業や人々の暮らしがどのようなものであったかを知ることができ、日本文化の根底にある価値観や生活様式を理解する手助けにもなるものです。

四. 言語と表現

万葉集は、日本語の初期の形である「万葉仮名」を用いて書かれており、古代日本語の美しさや表現力を示しています。特に、比喩や象徴を用いた表現が豊かであり、詩的な言語の発展に寄与しています。自然の美しさと人間の感情を巧みに結びつけています。

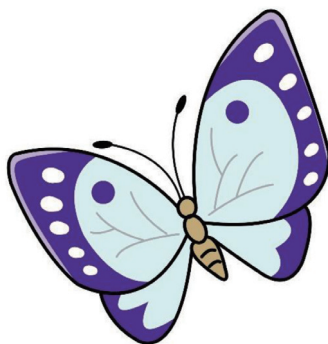
*日本人の感性

万葉集の歌は、自然、愛、社会的背景など多様なテーマが詠み込まれており、古代日本人の底に流れる気持ちや思いを読み取ることができます。日本人の持つ自然な感性の元がそこにはあると思わ

れます。

もちろん、これらの歌を通じて、その時代の文化や価値観を感じ取ることができ、現代においても、その影響は色あせることなく受け継がれております。ひいては日本固有の文化として発展したことが分かります。

万葉集は、日本文化の根源を探る上で欠かせない宝物です。万葉集は、日本人の内面の文化において、大きな位置を占めていると言えるでしょう。



座談会 手塩にかけて育てられ

埼玉 (故) 森 芳昭

＊自衛隊訓練中、九死に一生

森 私がこの道にご縁を頂いたのは、昭和三十八年八月ですが、その前に兄が繋がっておりまして、否応なく連れて来られました。

小さい時に父を亡くしておりましたから、兄が親代わりのようなものでした。兄は岡本宗遠といつて、二回位、常住もさせてもらい、とてもこの道に熱心だったんです。昭和五十八年に亡くなりました。

高校を終えた昭和三十年当時は、まだく就職難でして、私は三十五年までの五年間、自衛隊に居りました。航空部隊の整備係でして、それが生涯の仕事を決めてくれました。

除隊して、石川島播磨重工業の航空エンジン部門に入つて十八年、その後は、本田技研で十五年になります。ここでも、航空自衛隊の戦闘機エン

ジンなどを作っています。

あたらしい道で、初めてみたまさんを教えてもらいましたが、(あつ、あれがみたまさんの能き^{はたら}だったんだなあ)と想ったことがございます。

それは、昭和三十四年八月のことでした。千歳自衛隊に居りましたので、仲間四人と恵庭岳に登ったんです。私は昼頃、沢登りをしていたのですが、足を踏み外して二十メートル下の滝壺に落ちてしまいました。

千葉の実家には、母親も他の家族みんながいたのですが、テーブルの上にあつた水差しが、なぜかピンと音を立てて割れてしまったそうです。

水を拭くやら大慌てしていたら、ニュースが流れて、名前も出身地も私のものに一致するものから、大騒ぎになったと云います。

後で調べると、遭難した時刻と、ぴつたり一致

しておりました。みたまさんが、時間空間を超えて、知らせたんじやないでしょうか。

——どうやって助かったのですか？

森 二人同時に落ちたのですが、その上方に仲間が二人いたのです。すぐに救助活動を開始してくれたので、滝壺に落ちた私たちも無事救助されました。人の行かない所でしたから、今思ってもゾツとします。

傷だらけで滑り落ちているうちに意識はなくなっていました。私は、菜の花畑のようなところに横たわっている感じでした。痛みも何もなく、とても気持ちよかったです。

しばらくして、意識が戻りましたが、全身打撲で動けません。救助隊が来ましたが、その日は天候が悪く、あくる日になって救助されました。

*下座とお仕込み

——大先輩として、この道でのご体験をちょうだいしたいのですが、

森 三十二歳の頃ですから、つながって五年目位でしたね。みたまさんから突き上げられて、七

転八倒したことがあります。

まる一週間、年末年始の休日だったのですが、腹が痛くて、のたうち回って息をするだけが精一杯でした。飲まず食わずでいたから、げっそりと痩せてしまい、痛みが去ってもフラフラです。一日中寝たきりで、やっと歩けるようになりました。

当時は、「医者に行くな」というのが合言葉でしたから、お詫びをするだけでした。それで、体が回復した後はケロリとして、何の症状もないわけですから、やはり、病気はないわけで、みたまさんからのお試しだったのでしょうか。何かを知らされたのでしょうか。

「自分のことは言うな」と言われていましたので、このことは、松の間の発言でも、道友にも黙っておりました。いま、初めて（平成六年）言いました。

もう一つは、何時だったか、記憶が定かではないのですが、たしか夏の頃でした。紫の間の御垂示、それから人さんのお仕込みまでが、全部、自分自身に当てはまるんですね。（そうだと）と、どんく、みたまさんに落ちて行くような感じでした。

そのあくる日、その晩は妙に冴えなくて、ボウツとしてご垂示を聞いていたのですが、お仕込みになつて、突然、自分の名前が呼ばれて、飛び上がるくらいにびっくりしました。

お仕込みで私の順番が来ましたら、「お前さんみたまが 能はたらきましたわな」とおつしやるんです。その前後から、もう何となくわくわくしてきて、嬉しくてしょうがないんですね。紫の間から出てきても、喜びを誰かに聞いてもらいたくて、誰彼なしに声を掛けたことを覚えております。

この道では、「一切が天からの仕廻し」と、教えて戴いていますが、本当に成つて来る一切を、(そうだく)と戴くより他ないと思いますね。私としては、いつも天から見られて、手塩にかけて育ててもらったというのが実感です。

最初の会社が、造船不況で人員整理があり、そのお陰で私は三月下座に入ることが出来ました。

その後、また格好の会社に入れてもらったりして、天の差配によつて、レールを敷いてもらっているんですね。自分はただ、その上を走っているだけ、といった感じでした。一切を理として戴けば、肚が据わつて、気分も壮大です。

情の思いも必要でしょうが、それにこだわり過ぎると能きがまとまつてこない。人間らしく通っているようでも、結局は我欲なんでしょうね。そんなことを思いました。

これから、天の道具として使つて戴けるよう精進して、ご恩返しをしないと申し訳ないと思つて居ります。

(平成六年)



松風人悟「合力」と「絆」

六根味（東京（故）佐藤宗三）

たまたま手にしたスクラップの新聞記事の中から、こんな事件があった事を知った。それは国電で下車しようとした女性が足を踏み外して、電車とホームの間に挟まれて動けなくなった。それを見た人々が数十人、力を合わせて車輛を押して女性を引き上げた。女性にけがもなく、人々はホッとして喜び合った。

その場の光景がスクープされ、写真が海外にも伝わったので、外国の人々は、彼らには考えられない日本人の行動に感動したという。この記事を論説委員がコラムとしてまとめたのを読んで、こちらも楽しくなった。

民族性の違いであろうか。こういう場面に居合わせたら、とにかく女性を助けようとするのは当然のこと、特に称賛されるような行動ではないのにと、首を傾げてしまう。ともあれ、日本人の特

性を認められたのだから悪い気はしない。

日本には以前から、「義を見てせざるは勇なきなり」という諺がある。「義」というと大げさだが、普通は「筋道の通った正しい行い」という意味で、人として当然行うべきことと知りながら実行しないのは卑怯者だ、臆病者だと、そしられてしまう小生のような戦前生まれの者たちは、子供の頃からこうした警句が自然と身についてしまっている。ところが、戦後生まれの人々には、わが身可愛、ミイイズムが徹底し、「君子危うきに近寄らず」とばかり、自分に関係のないことはつい、見て見ぬふりをしてしまう。外国人が我々の行動を尊敬するのも、自己主義のせいであろう。

それでも、難儀している人を見たら、つい助けたくなるのが日本人の真心で、それは道式に云えばみたまさんの指令によるものなのである。こう

した行動を、このコラムでは、昔から「合力」というのだと、その出典を詳しく解説されているので、孫引きで申し訳ないが紹介したい。

「力を合わせる」ことを、古くはコウリョクと云つて、「力を添え助ける」意味で、「金品を人に施し与える」ことにも使う。つまり災害時の義援金や歳末助け合いも立派な「合力」である。

このように、「力を添えて助ける」とことと、「施し与えること」の二つの意味は、「見返りを求めぬ人助け」という気高い特性の発露なのである。

先日、テレビで観たのが、少数民族をテーマにしたルポで、人の親切に感謝する「義」というコトバに反応する神経細胞がどれだけ作動しているか、その受取りの度合いが人種によっていろいろ差があるという。

人の身になってこまごまと反応する度合いは、ブータンが最高ということだ。ブータンはヒマラヤ山脈の南麓にある、人口百五十万ほどの国で、国王を中心に助け合つて暮らしている。かつて国王夫婦が来日された際、いつもなごやかに合掌して感謝の気持ちを表しておられる姿が、いまだに忘れられない。

情緒をつかさどるのが神経細胞であるとするれば、こうした比較も可能であろうが、日本人の場合は、みたまさんが発動して下さるのだと解釈したほうが分かりやすい。

繰り返して云うようだが、「合力」は日本人にとつて、何か異常事態が発生すると、みたまさんが発動し、先祖伝来の血潮がわき立つ。日常生活でも、向こう三軒両隣のつき合いは全国どこでも見られ、お互い助け合つて暮らしている。これこそ日本人ならではの特性であることは大いに誇つていい。

この美風は来るべき、世直り・国替えの際、道の者が率先して実践しなくてはならないことだ。

(平成二十六年)



江戸時代の長屋

或るクレーム

——もとはすべて自分にある——

埼玉（故）山本紘治

私は、七人兄弟の五番目で三男坊。金沢市で生まれ、漁師の父に勧められて剣道を習い、主将ということで友達も一目置いてくれました。その後、進学に当たって学校は、警察学校を推薦してきました。

そして、警察学校を終えると、すぐに県警本部に配属され、いくつかの剣道大会にいい成績を残すことが出来ました。そんな華やかな時代を過ごし、やがて県警を退職し、余生を送ろうとしていくと、新聞広告に近所のクリーニング会社の部長職の募集が載っていました。私はふと、第二の人生をクリーニング業で過ごしたいと思ったのです。

クレームは、どんな職場でもあると思いますが、

クリーニングの場合は非常に多い。「色が変わった」「破けている」と、確信を以って言われますから強烈です。善意でも大変なのに、悪意でやられると、もう手がつけれません。

この道で、「原因^{もと}は、すべて自分にある」と教えられていきますから、そんなとき、部下に責任を押しつけることは出来ません。自然に、クレーム引受人みたいになつて、何でも、私が一番先に行くわけです。

店は大田区にあつて、近くに田園調布もありますが、随分、豪華なお宅にも出入りしておりますが、ある日、ミンクのコート、ベンツに乗つて、というお客さんがあつた。担当が飛びついて、みるみるお得意様になりました。だが、（どうも様子が変だなあ）と思っていいたら、案の定、暴力団の大親分でした。

やがて、組の方からも戴くようになりましたが、これがイチヤモンをつけ出した。「ここが破けている」なんてことを言う。担当が言い訳をする、「なんだテメエ、文句あるか」とすぐまれる。帰つて来ても、ふさぎ込んでしまつて、仕事にならないわけです。間もなく、「部長、こういう訳です」。(これは、放つておけん) と思つたけれど、自分だつてイヤでした。

電話をかけると、「親分は、マカオへ行つて留守だ」と言うんです。私は、内心ホッとしてましたところが、そのとたん、(何でも喜べ、そこに妙がはたらく) というお言葉を思い出しました。

そこで、「よし! とにかく行こう」と、飛び出しました。玄関に入つたら自分が出てきて、「居らんといっただろう」。「すみませんでした」と引き上げようとしたら、電話がけたたましく鳴りました。

自分が取つて、「あつ、親分ですか。アネさんもご一緒で。そうですか」ということです。「偶

然みたいな時にこそ、みたまさんの能きだと思え。^{はたら}逃げちやいかん」と、先輩から教えられています。私は「じゃ、待たせてもらいます」と言つて肚を据えました。

アネさんは顔見知りです。「何か、ご用があるそうね。こちらへ入りなさい」と、でっかい応接室に通されました。幹部連中が忙し気に出入りする中で、こっちはペタリと正座です。

「実は、今度この者が担当替えになります。あたらしい担当者ではそそうがあつてもいけませんので、この際、お取引をご勘弁願ひとう存じます」聞くなり、アネさんが、物凄い剣幕で怒り出しました。

「お前、何を言つてゐるんだ。どんな大きい店でも、そんなことは言わないよ。それを偉そうに、自分からご辞退申しますと? 何だそれは! お前のちつばけな店なんか叩きつぶしてやる」

ところが、こっちはあれ程緊張していたのに、相手が怒れば怒る程、落ち着いてくるんです。

「しかし、これは仕方のないことなんで、どうぞ、お聞き入れ願いたい」と、平気で言えるんです。

そうしたら、横にいた親分が、黙って煙草を喫っていました。

「あんた、他に本当の理由があるのだろう」と言うんです。「さすがだなあ」と思ったけれど、私はそこでジッと間合いを取りました。他から言葉が無いのを確かめておいて、

「親分さんがそうおっしゃるなら、この際、本当の事を申します」と、今までのことを、ダーツと言ったんです。じつと聞いていた親分が立ち上がった、「全部集まれ！」というわけです。二階にも子供がいて、ゾロゾロ入って来た。みんな正座です。

さあ、そこで親分が物凄い怒りようです。こういう世界では、子分はボロチョンなんです。口

を極めて罵ります。

「ウジ虫どもが何を考えてるんだ。お前らがこの店を使うのは十年も二十年も早いんだ。俺が使っているんだ。俺の顔に泥を塗る気か。お前らがヤクザということ、素人さんは顔見ただけで分かるとるわい。それに輪をかけて脅かしや、どうなると思ってるんだ」

やがて、アネさんまでがのつちやつて、

「だから、私にまで言われるのよ。この店は私に気に入っているのよ。お前ら、二度と許さん」

それから、「いくら、たまっているのよ」と言つて、今までの売掛金を、その場で全部払ってくれました。やはり、なめられたくないという格式は持っています。

このことがあつてから、うちのスタッフが安心して出ていく様子がハッキリ目に見えるようになりました。

すべては、天が見ていて下さることと、私が一番よく分かるわけなんです。

日本の人柄

頼山陽

東京 関塚禎人
静岡 内藤吉隆

頼山陽（一七八〇年―一八三二年）は、一七八〇年に現在の広島県に生まれ、幼少期から学問に秀で特に漢詩や歴史に関心を持ち、若い頃から文才を発揮し、詩人としての名声を高めた。

その生涯の中で明治維新を迎えることはなかったが、彼の思想は後の時代に大きな影響を与えた。その著作物は勤王志士たちにとってのバイブルとも言われ、明治維新の思想的中心に位置づけられる。

彼の代表作に、『日本外史』や『日本薬府』などの詩集がある。

★著作『日本外史』

頼山陽といわれて、その人物を即答することができる方は少ないであろう。ただ彼を知らない方でも、

「敵は本能寺にあり（「吾敵在本能寺矣」）という言葉を知らない方はいないのではないか。この言葉は『日本外史』の「徳川氏前期 織田氏」最終盤に現れる。

頼山陽の『日本外史』という書物が、なぜ頼山陽によって書かれたのかということに触れることにする。

頼山陽は、徳川十代將軍家治、即ち田沼意次執政時代の安久丸（一七八一）年、大坂で私塾を営む朱子学者の頼春水と梅颯との間に長男として生まれしました。諱（本名）は襄、字（通称）は子成、幼名は久太郎、山陽は後に付けた号の一つである。

まさに彼の生まれた年、父春水がその名声によつて芸州浅野家に藩儒として招へいされて、一家は大坂から広島に移り住み、山陽もその地で成長する。幼くして博覧強記、絶倫の詩文の才を顕

わし、特に歴史に大いに関心を示した。山陽は頭脳明晰な子どもだったようだが、神経過敏なところもあったようで、時おり情緒が不安定になることがあったということが、父春水や母梅颯の日記によつて知られる。

寛政十二年（一八〇〇）、二十一歳の山陽は、頼家の本家があつた竹原の大叔父が亡くなつたため、江戸藩邸に赴任中の父春水の名代として、竹原まで弔問に出かけた。ところが、広島から竹原への道中でにわか^{きようそう}に狂躁の想いに囚われて、山陽は突如姿をくらまして広島藩を脱藩し、京都に潜伏した。二週間ほど後に浅野家に仕える叔父の杏坪^{きようへい}によつて京都の潜伏先を突き止められ、身柄を確保された山陽は広島に連れ戻されて、遂に屋敷内に急きよ造られた座敷牢に閉じ込められ、頼家の跡継ぎとしての身分を解かれる、いわゆる廢嫡処分を受けた。

座敷牢での三年に及ぶ幽閉生活の中で、山陽は自らが招いた失態によつて無用者になつてしまつた自分自身の存在価値を世間に向けて証明するために、本格的な歴史書を著述したいと思うようになった。

山陽が歴史書の著述に取り掛つたのは、座敷牢に幽閉されて三年目の享和三年（一八〇三）、二十四歳に初稿として書き上げられたものが、『日本外史』であつた。その後の執筆過程においては、当初予定した書名だけでなく構想や内容もしばしば大きく変更され、試行錯誤と推敲を経て、十一代家斉の文政九（一八二六）年、山陽四十六歳の時の二十三年後によく『日本外史』二十二巻として完成されました。

翌年松平定信に献上され、さらにその二年後に大坂の三書店共同で出版されて初めて世に出ることとなった。

頼山陽は天保三（一八三二）年に五十二歳にて没するが、『日本外史』が洛陽の紙価を高め始めるのは、没後十二年を過ぎた頃である。

武蔵川越藩が藩校の教材として『校刻日本外史』を刊行すると、それが他藩や市井にも大評判となり、多い年の売上げは一万部に達したと云う。さらに嘉永元（一八四八）年には決定版とも言える「頼氏正本」が出て、これもまた当時としては驚異的な部数を記録した。以後、幕末から明治にかけてこの書物は多くの人々に読まれてベストセラー

になり、その一部は英語・フランス語・ロシア語などにも翻訳されて、著者の頼山陽は「文豪」と称されるようになつた。

★『日本外史』の内容

『日本外史』は平安時代中期における源・平二氏に代表される武家の登場に始まり、源頼朝によって鎌倉幕府が開かれて以後、室町幕府、戦国時代を経て、江戸幕府の創設から江戸幕府第十一代將軍徳川家斉に至るまで、およそ九〇〇年に及ぶ武家政権の移り変わりを、司馬遷の『史記』の紀伝体の形式で記した漢文体の歴史書である。源氏・新田氏・足利氏・徳川氏を武家の正統と見做して「正記」を立てた。同時に歴史に登場する人物たちの表情と行動を生き生きと描く文学作品でもあつた。

さらにそれぞれ、「源氏前期」に平氏、「源氏後期」に（執権）北条氏、「新田氏前期」に楠氏、「足利氏後期」に（小田原）北条氏・武田氏・上杉氏・毛利氏、「徳川氏前期」も織田氏・豊臣氏を配している。「関ヶ原」などのその時代の重要な歴史事件は各記に重複して記載され、相互に補完しあつて

その事件の全貌が浮き彫りになるよう工夫されている。これは固より『史記』の手法である。

★『日本外史』の特徴

この書物の特徴は、天皇が日本の正統な統治者であることが強調され、その権力が武士に移行していった様子を「勢」として描写する一方、その批判が徳川幕府にも向いていることである。

これは、天皇が政治権力を取り戻す可能性を持つ、という主張を切り拓く端緒となり、かつ民間に流行することで、政治的にも尊王傾向が強まることとなつた。

天皇の権威を重視し、外国勢力に対抗するための国民の結束を呼びかけるもので、特に、彼の「国を愛する心」は、当時の志士たちにとつての重要な価値観を作り、多くの志士たちが彼の思想を受け入れ、行動に移す原動力となつた。

★明治維新における位置づけ

明治維新の時代に入ると、頼山陽の影響はさらに広がりを見せた。彼の思想は、新しい日本を築くための基盤となり、特に国家の独立や近代化を

目指す動きにおいて重要な役割を果たした。

明治政府の成立後も、彼の歴史観や国民意識は、教育や政治の中で引き続き重視され、近代日本の形成に寄与した。

頼山陽は、幕末から明治維新にかけての日本において、思想的な中心人物としての地位を確立している。

★渡部昇一氏の『日本楽府』評

渡部氏昇一紙は、次のように述べている。

「頼山陽は日本の通史を一人で書いた最初の人である。一つの国の通史というものは、なかなかできるものではない。イギリスのようなヨーロッパの先進国でさえ、通史はデイビッド・ヒュームのものが最初である。幕末の人たちは頼山陽の『日本楽府』を読んで、古代から歴代の天皇中心の日本通史を学んだのであった」「伊藤博文が井上馨らと幕末にイギリスに密出国したときに持っていた本が、まさにこの『日本楽府』。明治に始まった国史教育は、その流れを汲むものであった」

『日本外史』の根底を形作っている山陽の歴史哲

学を、成蹊大学名誉教授の掛斐高氏が「勢」と「機」の歴史哲学―『日本外史』の方法」という 주제로、令和三年に天皇陛下にご進講されているので、ご興味のある方は宮内庁のホームページを参照されることをお勧めする。

〈参考書籍〉

日本外史 徳川氏正記 木村岳雄（草思社）
戦う江戸思想 大場一央（ミネルヴァ書房）
古代史入門 渡部昇一（PHP研究所）



頼山陽像
帆足杏雨筆 広瀬旭荘賛
京都大学総合博物館蔵
(Wikipedia より)

大和撫子

戦国の女城主 立花闇千代ぎんちよ

神奈川 芹澤和彦



戦国後期、織田信長が本能寺の変で亡き後、豊臣秀吉が天下を統一しようとして着々と歩を進めていくころのことである。九州では、薩摩の島津氏しまづ、豊後の大友氏おおとも、肥前の竜造寺氏りゅうぞうじが、周辺の戦国大名の土地を奪って勢力を延ばし、互いに睨みあっていた。大友氏は宗麟そうりんの時代に絶頂期を迎え、豊前・豊後・筑前・筑後・肥後、日向、六ヶ国にまたがる大勢力となる。今で言う大分県・福岡県・熊本県・宮崎県を持つことである。

天正六年（一五七八）、大友の軍勢五万は薩摩打倒に向かう。兵数が薩摩の数倍もあるのに、楽勝と思つた宗麟は、前線には出て来ず、はるか後方にあつたので大友軍は統制がとれず、武将たちを掌握できなかつた。これを見ていたのが島津の大將の義久よしひさである。自身が考案したという「釣つり野伏のぶせり」の戦法で「耳川の戦い」に大勝利する。

その戦法とは、まず部隊を三つに分け一隊が敵の軍勢と戦つて、わざと負けたふりをして後退する。これが「釣つり」である。これがチャンスとばかりに敵が追撃すると、隊列が伸びきつた側面に伏兵の二隊が左右から襲つて挟み撃ちをする。それと同時に後退した一隊が、とつて返して三包囲して敵を叩く。「野伏せり」が見事成功ということになる。

一度大敗すると、野心を持った部下は離れていくか有利の敵方に寝返りをするのが戦国の習いである。そればかりでなく、宗麟の場合は「日向にキリシタンの国を創る」ということで、寺社仏閣を破壊して、将兵や良民のうらみを買っていた。

北上してくる島津氏の勢いはすさまじく、次々と小領主たちが味方をした。豊後（大分県）に拠点を構えていた大友宗麟さえ滅ばせば九州全土は

島津のものになる。

そんな大友家の窮地の中、「最後まで大友宗麟殿に尽くす」という二人の武将がいた。戸次鑑連（後に立花道雪と名乗る）と高橋紹運である。道雪の娘で七歳で立花山城の城主となったのが閨千代である。また、その夫となるのが紹運の長男である統虎（後の立花宗茂）である。

宗麟の重臣道雪は、豪勇の将として近隣に鳴り響いていた。もし、彼が九州でなく、もつと中央の地に生まれていたら、戦国の世は大きく変わったものとなっていただろう、とも言われる程の智と武を兼ね備えた武将であった。まだ十四歳のとき、敵勢五千人の籠もる城に三千の兵を率いて戦い、敵を投降させたのが初陣であった。

しかし、彼は若かりしころ、大木の下で炎暑を避けていたときに雷に打たれ、歩行がままならぬようになってしまった。だから武将になって出陣するときは輿に乗り、左右には長刀を持った若武者百人を引き連れ、戦が始まると「この輿を敵の真ん中に引き入れよ」と命ずる。長刀を抜き連ねて一団が敵中に斬り込むので敵は恐れて逃げ腰になつてしまう。時には味方の先陣が崩れてしまう

ことがあるが、そんな時は道雪が大声で「我を敵中へかき入れよ、命惜しくば、そのあと逃げよ」これでは逃げることもできず、勇戦あるのみということで、盛り返して勝利を得ることが常であった。また、あるじの宗麟が酒色に溺れて政治に力をいれなくなると、命をかけて諫言する。もし宗麟が逆上して刀を抜いたら、歩行困難の道雪は攻めをかわすことができなかったであろう。このような誠の武士に甲斐の武田信玄も書を送り、道雪との対面を望むほどであった。

そんな道雪には、困ったことが一つあった。世継ぎである。最初の妻を失って久しかった道雪が筑後長厳城主の娘の仁志姫を迎えたのは永禄十一年（一五六八）である。仁志姫も初婚でなく、一男一女をつれて再婚した。道雪は五十六、仁志姫は三十をすぎたばかりであった。男の子は亀菊丸、女の子は政千代といった。翌年閨千代が生まれた。道雪には、跡を継ぐべき男の子がいなかった。

いつそのこと亀菊丸をとも思ったが、彼は骨細の病身でころもとない。もたもたしていて、もしものことがあつて道雪が死んでしまつたら、たいへんなことになる。そこで道雪は閨千代が七歳

のとき、男子の相続と同じ手続きを踏み、主家の大友氏の許しを得て、立花山城の女城主とした。

女子の家督相続は、戦国時代では実にまれである。だが、知勇備えた将道雪が期待をかけたほどだから戦乱の世を生き抜く才覚と強さを兼ね備えていたのだろう。まして後見人として道雪が育てていけば、立派な城主となるであろう、との期待があつたのでしよう。

宗麟を支えたもう一人の武将、高橋紹運は、大友家の重臣吉弘鑑理の子として生まれ若くして「度量寛大にして、高義真実の士」と評判になり、名門の高橋家を相続、太宰府にほど近い宝満城ほうまんじょうと岩屋城の城主となる。武勇に勝れていただけでなく、高潔な士でもあつた。

紹運が斎藤鎮実しげさねの妹と婚約した後のことで、この女性が疱瘡ほうそうを病み、あばた面の醜い姿になつてしまつた。鎮実は、こんな姿ではと婚約解消を申し入れると、紹運は答えた。

「吾が彼（鎮実の妹）をめとらんと欲せしは、彼が資性美なるにありて、彼が顔色の美なるにあらず。今吾が意の無き顔色は変ぜしも、吾が意の在る所の資性は変ぜざるべし」

と、婚約を解消せず妻とした。こういう人柄だから、人々はどうな時でもついてきたのでしょうか。道雪は、七歳の娘閨千代に家督を譲り、一旦は安心するものの、年老いた自分が死んだら、その後はどうなるか。信頼する家臣はいるが、やはり危惧は残る。用意周到の道雪であるから、立花山城をしつかり守り通し、閨千代と共に立花家を繁栄させることのできる婿を選ばねばならない。考へに考えた末、白羽の矢を立てたのが盟友の紹運の長男統虎むねとらであつた。

父の紹運は、わが子を道雪の偉大さにふれさせようと統虎を道雪の立花山城に遊びにいかせることがあつた。ある日、統虎が来たときのこと、道雪は彼の目の前に死罪に当たる者を引き出させ、家臣に命じて、その首を刎ねさせた。そして、道雪は統虎の胸に手を差し入れてみた。心臓は少しも動悸をしていなかった。統虎の豪傑ぶりに感心した道雪は、不動の決意で紹運から養子にもらいけることに成功した。

統虎は、名残惜しい家族、家来たちに別れを告げ、宝満城を出た。見送る皆が手をふっているのに、彼は一度も振り向かなかつた。統虎が立花山

城に近づいたとき、道雪の「出迎えよ」の声にも従わず、闇千代は城内に止まっていた。「立花山城のあるじのこの身が、わざわざ大手門まで出る訳にはまいりません」という意思表示である。失礼なことよ、という者と、頼もしい姫さまよと、家来たちも様々である。

美しい顔に似合わず闇千代は勝ち気である。もつとも女城主として七歳のときから猛将道雪に仕込まれてきたのだから、兵法にも武術にもそこそこの力を持っている。体も大きいし並の男なら立ち合ってもかなわない。城内でいよいよ統虎と対面となった。すると、いきなり闇千代は、侍女に二振りの木太刀を持ってこさせた。

「統虎どの、お相手くだされい」

「何と、この場所で……」

「闇千代より弱いお方では、嬪殿になるわけにはまいりません」

道雪が無礼をたしなめると、重臣の一人が「おもしろうござる」と声をだし、周囲の者が身を乗り出した。闇千代は身支度を終わると、

「統虎どの、いざ」

「よろしい、女相手では不足だが」

と、立ち上がって大広間の中ほどで二人がむきあった。勝負は瞬間にいった。統虎が一步ふみこんだとたん大きな音を立て、闇千代の木太刀が天上近くまではねとんだ。「それまでつ」と道雪が叫んだ。闇千代は恥ずかしさと悔しさで、その場を走り去った。

このことが有つて、一カ月も経たない九月、豊後からの使いが、

「高橋紹運と共に、筑後へ出陣せよ」

という宗麟の命を道雪に伝えた。いよいよ統虎の初陣である。大友家に属する井上城の間註所あきかげ鑑景が反旗をひるがせ、敵方の秋月氏についてしまったのだ。宗麟の命令で井上城を囲んでいる兵を助けるためである。

道雪は、いつも通り輿に乗り、そのあとに統虎のりりしい馬上の姿があつた。「とても十五の若さとは思えません」とか「見事な殿御ぶり、闇千代さまがおうらやましい」の声を後に、井上城に向かう。そこでの戦いで統虎は、もっぱら得意の強弓を使い、敵兵を数人射倒した。その直後、敵の剛勇武者堀江備前が突進してきて統虎の前に立ち、はだかり組み討ちを所望する。統虎の家来たち

は、真つ青になったが「加勢無用」と言い、格闘になった。しばらく組み合っていたがついに備前を抑え込んだ。やがて道雪の軍勢の、ときの声に敵方は潰走した。

戦いの一カ月後の十月、闇千代と統虎との婚礼は盛大を極めた。その日から統虎は「闇千代殿」という呼び方をやめ「闇千代」と呼び捨てにした。「今夜から私はあなたの妻でございます」の新妻のはっきりした言葉を聞いたからだ。

「先の日のことは、ちと手荒ら過ぎたな、許せ」と、宝満城からこの城に入ったときの木太刀の試合のことにふれると、

「なにをおつしやいます。あのとき女だと手加減などなさったら、わたしはあなたに期待できなくなっていたでしょう」

勝ち気ゆえに、かえって統虎の果敢な行為に好感をもったのでしよう。そのことをその場で、はっきり吐露すればいいのだが、それができないことで、後の二人の関係はぎくしゃくすることが多くあり「不仲」ではないのかなどと思われることがあったのだ。

天正十二年(二五八四)立花山城に来てから三年

が経ち、統虎は十八歳に、闇千代は十六、養父道雪は七十二歳となった。この年は九州の地は戦が多かった。肥前の龍造寺隆信りゅうぞうじかのぶが有馬晴信ありまはるのぶを討とうと肥前島原に五万の大軍で攻め込んだ。晴信は薩摩に援軍を頼む。しかし、薩摩軍三千をあわせてもやつと一万程度だ。もし、龍造寺が勝てば、その勢いにのって大友に侵入してくる。だが、結果は意外にも数をはこる龍造寺が負けて、総大将の隆信は、首までとられてしまったのだ。大友家は当面の敵はなくなつたが、意気あがる島津が攻め上がって来るのは確実である。

その四カ月後、大友義統おおともよしむね(宗麟の嫡子)は、龍造寺側の城を次々と攻略した。残るは最大の拠点柳川城である。ところが、城を囲んだまゝいつまでたつても落ちない。道雪、紹運も攻めあぐんだ。この長い陣中で年老いた道雪が病没する。

中陰(四十九日)が過ぎると、統虎は闇千代にかわって、正式に立花山城の主となる。島津義久は、秀吉の「大友と和を結べ」の書状を笑ひ飛ばして、大友攻略の策を練っていると聞いている。

天正十四年(二五八六)島津の脅威が筑前に迫つた。この時、紹運が宝満城の支城である岩屋城に

七百人あまりの兵と共に籠もったのに対し、薩摩の島津は五万の大軍で囲んだ。島津勢は、猛攻を加えつつ、三度四度と好条件の降伏を勧告したが、紹運は、頑として拒みつづけた。宗麟が秀吉に援軍を依頼しているので、籠城して持ちこたえれば逆転できる可能性がある。島津勢は死骸の山を築くばかりである。

この開戦に先だって統虎は、実父の紹運に立花山城にはいるよう勧めたが、これに応じようとはしなかった。

「いかがなされますか」

寝所で闇千代は夫統虎を見あげた。声に普段より温もりがこもっている。

「岩屋城のお父君を見殺しにはできません。一刻も早く援軍をお送りなさいませ」

「そうは行かぬ。死ぬと決まった戦に立花の兵はつかえぬ」

今は立花山城の主である自分が、実父高橋家のために部下を使う訳にはいかぬのだ。

「なれば、私が申し付けてもよろしうございます。黙って死んでくれる者は、わが家中にも何人もありませんれば」

自分の苦衷を察して、思いやりのある闇千代の言葉が身にしみた。しかし闇千代の口から家臣たちに言わせる訳にはいかぬ。

立花山城からの決死の援軍三十名ほどが、岩屋城の紹運の傘下に入り、七百余の兵が籠もったが、敵の薩摩の大軍は苦戦に苦戦を重ねた。三千以上の死傷者を出した。この戦いは歴史に残るものとなり、後に会津藩の藩校である日新館の教科書にも載る、それほど熾烈なものであった。

間もなく立花山城も島津勢に包囲された。しかし岩屋城で懲りたのか、降伏勧告ばかりに時をついやした。城内では、女物の具足を付け、白鉢巻の闇千代が侍女たちをまとめ、男に負けぬ意気さかな様子である。

いよいよ開戦か、というときに秀吉軍二十五万の先陣が九州に到着し、島津軍は退却した。統虎は「今こそ岩屋城で死んだ者たちの霊に報わねば」と、小勢を顧みず多勢の島津軍を追い、数百を討ち取り、さらに敵の手に落ちていた岩屋城と宝満城を奪い返した。それからは統虎の怒涛の進軍であった。

秀吉は「西国一の弓取り」と激賞し、統虎に柳

川十三万二千石の領地を与えた。ここに大友の家臣から独立した大名になったのだ。しかし、闇千代は「立花から去るのは悲しゅうございます」といつて困らせたが、秀吉の命ではさからえない。「貴方のお陰で、父道雪の名まで天下に知られ、うれしゅうございます」と思っていて口に出せない闇千代であった。

天正二十年（一五九二）、秀吉は朝鮮に出兵した。闇千代は「これは義のない戦です」というのを押し切つて、宗茂（統虎）は二千五百の兵を率いて海を渡つた。そこでも目を見張る働きをする。苦戦する諸大名の中で宗茂軍は負け知らずである。秀吉も「まさに日本一の武士」おおげさに褒める。そんな宗茂にも気掛かりのことがあつた。

「朝鮮から戻つて伏見城に参つたとき、殿下が前のことを口にされた。何故か、と氣になつた」

秀吉は朝鮮に渡つた大名の妻女を召し出しては夜伽をさせた、といううわさがあつた。もしや、闇千代が、という疑念が一瞬よぎつたが、闇千代ならばたとえ太閤であつても、おかしなことをすれば、必死に抵抗し、自らの命を断つだろう。あるいは秀吉を刺し殺し自害するにちがいない、と

思つてみると、闇千代は笑みを浮かべ応えた。

「お前様、私が太閤様の伽をさせられたと思われましたか」

秀吉が没すると徳川家康と石田三成が対立し、関ヶ原の戦いが起こる。家康は自分にくみすれば五十万石を与える、といつてきた。それほど勇猛果敢な武將を味方に付ければ、勝利は確実になると思つたのだ。闇千代や主な武將は「東軍におつきなされ」と勧めたが、宗茂は「わしは太閤さまにより大名に取り立てられた、豊臣家には恩がある」と言つて西軍についた。

いざ開戦になると、まず大津城（滋賀県）を攻略、みごとに開城させたが、なんと、その日に関ヶ原では東西軍が激突、西軍は敗北してしまつた。宗茂は間に合わなかつたのだ。宗茂軍は柳川へと部下と共に逃げ落ちていつた。

知らせを聞いた闇千代は、すぐさま戦の支度を調べ、宗茂の救出に向かい、筑後川のほとりで疲労困憊の立花軍に出合い、無事柳川城に連れ戻す。夫を城に送り届けると、彼女自ら甲冑を着け、薙刀を持つて出撃する。最初に海上から侵入してきた鍋島軍を撃退してしまう。そして、開城せよと

の説得に來た加藤清正二万の軍勢の前に立ちほだかる。「さすが道雪の娘、立花山の女城主、我が兵をみすみす失うこともあるまい」と、清正は迂回して引き返してしまった。朝鮮での戦いで危うく惨敗というところを宗茂に助けられたこともあったから、敢えて戦おうとはしなかったのだろう。

後に宗茂は、清正に城を明け渡し、家臣もひきとつてもらい、一介の浪人となる。このころのこと、閨千代の宗茂に対する深い愛情を示す逸話がある。閨千代は夫が信仰している太郎稲荷社に詣でて「わらわの命にかえて、夫をもう一度、世に送り出したまえ」と願をかけ、二年の後、病で三十四歳という若さで生涯を閉じる。「閨」と言う文字は「おだやかに」とか「やわらぐ」などの意味なのだが、閨千代は、それとは全く逆な生き方をしたようだ。でも、それは女城主として生きなければならなかったが故であろう。

元和元年（一六一五）大阪夏の陣では、徳川秀忠を警固して宗茂は出陣する。元和六年、旧領・柳川十万九千石の初代藩主に任ぜられる。宗茂は帰国の翌年、亡き妻・閨千代のために良清寺を建立し、その愛に報いたと言われる。

〈参考書〉

戦国「おんな家長」の群像

戦国大名論

姫たちの野望

立花宗茂と立花道雪

無双の花

武女

黒田春樹（笠間書院）

村井良介（講談社）

八幡和郎（講談社）

滝口康彦（学陽書房）

葉室麟（文春文庫）

杉山頼男（柏書房）



立花閨千代の肖像
作者不明 良清寺所蔵
(Wikipedia より)

寄稿

あたらしい道の目標は「世直り、国替え」

——新年度を迎えるにあたって、道の跡取りの心得——

埼玉 市野道明



略歴 市野光鵬氏次男、S43年明断、S44年下座、

S46年道友

主な著作

「日本の危機に問う」、「日本人の根源を問う」、
「すめらの道」

最近刊「日本の運命」(令和6年11月発刊)

1. 世直り、国替え

世直りとは、一般的には世の中を正すことを意味し、「世直り、国替え」となると、世の中を正して、国の体制、秩序を正しくすることを指す。もう一つの意味として、「世直り」とは、「余直り」のことであり、自己の改善や自己改革を意味する。この場合の「余直り、国替え」とは、天の摂理に沿うよう自分の精神を正して「みたま」に建て替わり、「みたま」になった誠の男がこの国を治めることを意味する。

おやかた様の出現は、国津神が治めていた仮の世から、天直々に創造主神が治める世の中に代わったことを教えている。国津神では治めきれなかったため、天に大政奉還したのである。

日本の政治も同様である。現在の政治では日本を統治できなくなってしまう、元の日本に戻らなければ、日本を守ることができない。それは、天皇が治めた治すしの精神に回帰することである。

天皇の「治す」精神は、国の安定、平和、文化の継承、倫理の指針、そして国難時の支えとして機能する。この精神は「日本の理（精神）」として、日本の歴史とともに育まれてきた重要な要素である。多くの人々に希望を与え、個人の精神的な向上や社会全体の発展を目指す指針となってきた。教育勅語はこの精神を綴った日本の宝であった。この精神に戻ることが今の日本を建て替える重要な指針となる。

天皇の治す精神し

1. 国の安定と平和の象徴

天皇は国全体の安定と平和を象徴する存在である。天皇の存在が国民に安心感を与え、社会の安定を保つ役割を果たす。

2. 倫理と道徳の模範

天皇の行動や言葉は、国民にとって倫理や道德の指針となる。天皇の品行や姿勢が国民の行動規範となり、社会全体の道德水準を高める役割を担っている。

3. 文化と伝統の継承

天皇は日本の歴史と文化を尊重し、次世代に伝えていく重要な役割を果たしている。文化や伝統の継承を通じて、日本のアイデンティティを守り続けている。

4. 国難時の支え

自然災害やその他の危機に際して、天皇は国民を励まし、支える象徴的存在である。災害時には、天皇のメッセージが国民に希望と勇気を与える重要な役割を果たす。

5. 平等と共生の精神

天皇の存在は、国民すべてに対して平等であることを象徴している。共生と調和の精神を大切にし、多様な価値観や背景を尊重する姿勢を示している。

2. 日本の再建

江戸の幕末期は、政治の腐敗や汚職が蔓延し、外国からの圧力が強まる中で、国の治安が著しく悪化した。この時期は巨大地震や大型台風、疫病などの自然災害も頻発し、人々の生活は大きな混乱に見舞われた。こうした混乱の中で、人々は地震が発生すると「世直

し、世直し」と叫び、「世直し大明神」の登場を祝うかのように「いいじゃないか、いいじゃないか」と歌い踊る「ええじゃないか」現象が広まった。これは、世の中の変革を求める民衆の願望が表れたものである。

現代も同様の現象が巷に溢れている。日本の政治は党派間の対立が深まり、政治資金の問題や政治家のスキャンダルなどで信頼を損ねている。経済は人口減少による市場縮小と物価高に直面し、企業の不正行為や経済格差などが深刻な問題となっている。外交では、中国による台湾有事や尖閣有事の可能性、ロシアと北朝鮮の軍事協力など、地政学的脅威が増大している。頻発する地震、SNSによる誹謗中傷やデマの拡散、悪質な詐欺や押し込み強盗殺人など、社会全体が倫理や道徳を見失った末世の状態に近い。

社会を変えたい。平和な人類でありたい。安全で美しい日本に戻りたい。それが国民の切実な願いである。国民の願いにこたえるためには、戦後に失われた「日本人の心」ともいうべき、「**肇国の精神**」と「**建国の精神**」を取り戻し、秩序ある国家を再建することである。

そのために、何よりも認識すべきことは、もともとの日本人は「**みたま**」の能く、「理の民族」であったことである。古くからの日本人はこれを「大和の国は言霊ことだまの幸さきわう国」と表現した。その自覚を持ち、この国の再建を果たさなければならぬ。

3. 道の跡取りとしての使命

このままでは「世直り（余直り）、国替え」になるまでに、あたらしい道が存在できない。そんな危機感すら感じる今日この頃である。道友の平均年齢が、来年になると80才を超える。おやかた様は、この道は「やかた一代」とおつしやられたが、私たちは「道の跡取り」としての使命を担っている。その使命は、天の道具として、「世直り（余直り）、国替え」を担うことに尽きる。そのために、おやかた様は私たちを道の要人として仕込んだのである。

4. 人類あらあら100年

あらあら100年とは人類が終わるのではない。今までの人類が築いてきた仮の世が終わり、世直り、国替えが完成する時期をいう。あと30年でその時期を迎えることになる。そして「みろくの御代」に建て替わるのである。しかし、これからの30年は「行くに行けない、越すに越せない」時期となろう。天はどのような形で、私たちにそれを見せつけるかは分からないが、御垂示から予想されることは、「巨大地震とロシアと中国の脅威」が日本を襲うことになる。このことは日本の歴史からも想定できることである。

おやかた様はそれに備えて、世の中の人に「みたま」を知らせておけと仰られた。このままでは、多くの人が亡くなり人口が3分の1ぐらいになってしまう。せめて3分の2は

生き残らないと日本が滅亡してしまうとおつしやられている。「みたま」は生きる力の根源であり、日本復活の源泉である。そのことを知らすことが私たちの使命である。

追記

かつての日本は「大和の国は言^{こと}霊^{だま}の幸^{さき}わう国」と謳われていた。この表現は、日本が言葉や精神の力によつて繁栄し、調和を保つてきた国であることを示している。「言霊」とは、言葉に宿る神聖な力や霊的なエネルギーを意味し、「幸わう」とは、幸福や繁栄をもたらすことを指す。この表現は、日本が言葉や精神の力を重んじ、それを通じて社会の安定や発展を築いてきたという思想を反映している。言葉には人々の心を動かし、社会を良い方向に導く力があるとされ、古代から現代に至るまで、その価値が大切にされてきた。

この考え方は「理の国、日本」という表現にもつながる。「理」とは道理や理性を意味し、日本が理性や道徳を重んじ、調和と平和を目指す国家であることを象徴している。

言霊の力と道理を重んじる精神が融合することで、日本は長い歴史の中で独自の文化と社会秩序を築いてきた。これらの精神や思想は、日本人のアイデンティティの一部であり、現代においてもその価値は変わることがない。今の日本を再生し、未来に向かって進むための重要な指針となるものである。

連載

羽曳野物語 (四)

柳田 節

——この物語は、史実を重んじていますが、シリーズ当初にあるように、個人の想像です——

★昭和の時代とは

私は、自分の生きた時代はどんなだったのか、自分の生まれた昭和の時代というものを、自分の手で整理してみたいという思いが、年々高まり整理し始めると、昭和は、ほのぼのとした懐かしい時代ですが、奥に時代の持つ閉塞感のようなものを感じました。

それが何か、最初は分かりませんでした。その経つにつれ、古くから続いた日本の文化が消失し、欧米文化に取って代わられたこと、さらにその取って代わった西洋の文明が行き詰まっていることが原因だと思いました。

いまだにその西洋の状況は変わらず、私たちの時代もまだその延長上にあります。世界的に見れば、

ば、西暦二〇〇〇年、つまり、二十世紀の終わりに、人類は二つの問題を抱えていました。一つは「自然破壊」、もう一つは「人同士の争い」でした。人類創世期以来の間違いを人間が起こしたからとも言われていますが、つまり、人が知恵や心に頼って生きるようになったことに根本の原因があります。

自然界との不調和が環境破壊を引き起こし、また人と人との不調和が、戦争という最悪の状況を産みました。人類は決して倅せな状況にあるとは言えません。

昔、神代の頃、日本では、頭脳や知恵ではなく、自分の中にある本当の自分「みたま」を中心として行動していました。その時代は、人は自然と神と同居生活をして人間らしい倅せな暮らしをしてい

ました。人はみな自分の中に、神性あるいは、靈性という、貴いものを持っています。それに従って生きたのが、神代の頃の日本人でした。

昭和の時代の人々は、欧米から発信された先進文化にかぶれ、日本を後進国と思い込む人々までいて、一時はまるで異国の地と化したかのようでした。

戦後、日本のものは古くさいと否定され、西洋から来たものは新しく素晴らしいと肯定されました。日本人にとって大事な遺産である日本の文化は、日本人のアイデンティティを形成するものです。それを価値のない不要物として多くは捨てられました。

しかし、西洋をまねた生活をする中でも、やはり、古き良き日本の記憶は、私たちの体内のどこかに残っていて、何かの折に甦ってきました。その記憶は、もはや今の自分だけの記憶ではなく、自分が生まれる以前からの日本人のDNAの記憶でした。

私たちはその古い記憶を、何かある度に思い出しました。例えば、東日本大地震では突如、昔の日本人の心情を思い出しました。私たちにとって

は当たり前、他人を気づかう行動が、外国人には、日本独特の行動として映り、話題になりました。

この震災で改めて、自分の中に古い日本的なものがあることに気づかされました。そしてそのとき、「元の日本に還るんです」と言われた、松木草垣女史の言が甦ってきました。

最も古い教えと言われながら、常にそれを新たな時代に甦らせる、古くて新しい道、その矛盾を超えることで、いまの日本の国を建て直そうとしたのが草垣女史でした。

縄文時代以前の、神代の頃から続く世界最古の国（王家）である日本は、神話の世界でいえば、いま、天上の世界から天下つて来て地上を治めようとしているところです。「国づくり」（古事記『修理固成』）をしている段階です。

ところがいま、地上では国同士で、方向性のない世界的に危うい状況に陥っております。そういう中で、私たち日本人は、何をする必要がありますのか、深く探っていく必要があります。

今こそ、一度、日本人の元の生き方に還ることが大事です。その上で、その生き方を現代に甦ら

せることが必要です。それがいまの日本を救うこととなるのです。まずは「元の日本に還ること」、そして、古い日本人の教え（世界観）が、それらのことを導いてくれます。

★古い日本の良さを知る

古い日本の言い伝えには、現代にも心に響く教えが沢山あります。例えば、今はマンションも増え、隣は赤の他人が当たり前の世の中ですが、昔は向こう三軒両隣と言つて、江戸時代の長屋のような人情味（良い人間関係）のある生活をしていました。一軒家なら、家の前を掃除すれば、ついでに隣の家の前も掃こうというのが、昔ながらの日本人でした。

縄文時代から家族を中心とする氏族同居社会が定着していた関係で、周囲に気を配る独特の「気づかい」の習慣があつたのです。いまでも日本人の心の中のどこかに、まだ、そのような風情が残っていることに気づくことがあります。それはもしも日本人自身が気づかなくても、日本にやってきた外国人が感じています。そのような古い日本の良さの一端を見ることができます。

第五章 難波と難波津

★早くから人が住みついた大阪

第四章で述べた、世界遺産『百舌鳥・古市古墳群』では、天皇直属の常備軍の存在を見てきましたが、もつと以前、古墳時代以前の羽曳野はどのようなところだったのでしょうか。羽曳野のさらに古い時代を見てみたいと思います。

羽曳野は、かなり古くから人がいたという記録があります。およそ三万年前から一万年前までの間、羽曳野では早くから旧石器人が活躍していました。ウルム氷期の最盛期（二五〇〇～一五五〇〇年前）には、海水面が現在よりも一五〇メートルも下がり、その後、気候も温暖化し縄文時代前期には海水面が最高に上昇して、「縄文海進」と呼ばれました。

このウルム氷期最盛期には、宗谷・津軽海峡及び朝鮮・対馬海峡は大陸とつながり、陸地を伝つて大陸のナウマンゾウが日本列島に移動し、これらの動物を追つて人びとがやってきたと考えられるのです。現在までに大陸の海底や大阪市内の地下鉄工事の際に、度々ゾウの化石骨が発見されて

います。

また、昭和三十九年（一九六四）、豊中市ではワニの化石が発見されました。南方に生息する種類のワニでこの化石が発見されたのは、わが国初の報告例として著名です。詳細は分かりませんが、当時ワニが生息できるような環境であつたことは確かのようなのです。

現在、大阪府下全域の旧石器時代の遺跡は一〇〇ヶ所を超えています。大阪における旧石器の研究は、国府遺跡（藤井寺市国府）の発掘調査から始まっています。

大阪府下に見られる旧石器の遺構は、二上山麓、羽曳野台地、生駒西麓、富田台地、和泉丘陵、上町・瓜破台地の六つで、そのうちの「羽曳野台地遺跡群」は、南河内を流れる石川左岸から羽曳野台地にかけて分布する遺跡で、国府型ナイフ形石器の命名のきっかけとなりました。その国府遺跡を中心に、約四〇ヶ所の遺跡が判明し、なかでも昭和六〇年に発見されたハサミ山遺跡梨田地点（藤井寺）では、国府型ナイフ形石器文化期に属する住居跡が出ています。また、翠鳥園遺跡（羽曳野市）は、旧石器製作のムラとして有名です。

国府型ナイフ形石器の後に続くものが大阪では、ナイフ形石器の小型化、それに続いて有舌尖頭器で、これから縄文時代へと時代は変遷していきます。大阪府下の縄文時代遺跡は、総数で三〇一ヶ所あり、獲物や植物の食料を求めて移動を繰り返していた人びとは、やがて縄文時代に入り、放浪から定住の生活に変化していきます。

★古代都市難波

「古代史上、重要な位置を占めた難波。水運・海運の扇の要として発展、大阪平野の治水や、屯倉の設置に成功、東アジアへの窓口として栄え、大友・物部・蘇我などの抗争を経て、難波遷都・大化の改新へ至る」（直木孝次郎著「古代難波とその周辺」）

羽曳野は、古代には河内国でしたが、難波も近い地域でした。「大阪」の名称が文献に初めて見えるのは一四九九年（明応八）の蓮如の文章であり、江戸時代には浪花・難波と並んで大坂の呼称が一般化しました。明治以降、大阪と書くようになりますが、ここで古代の難波について、右の『古代難波とその周辺』を元にして触れさせて戴きます。

難波の地の特色とは、まず、古代以来現代に至るまで海上交通の要衝だったことが挙げられます。もつとも発達した瀬戸内海の東端に位置することと、近畿地方で最も重要な河川である淀川と大和川とが当時、難波の北東で合流して海に注いでいます。当然ながら、それは難波が交通上極めて重要な場所に存在していることを意味します。つまり、古代都市として発展する条件が備わっていたということです。

この地には早くから人々が住んだことは、難波の中心ともいうべき上町台地の東南方に続く大阪市平野区の瓜破台地や南方の羽曳野市羽曳野に旧石器時代の遺跡が存することで知られますが、縄文時代や弥生時代には、上町台地にも遺跡が見られ、時代が下がるとともに増加します。古墳時代は大小の古墳が発見されています。

因みに上町台地という場所は、大阪平野を南北に伸びる丘陵地・台地北部は大阪市中央区の難波宮跡、大阪城付近・天満橋の辺りで、そこから緩やかに小山を形成し、天王寺区上本町の大阪上本町駅付近で台地の頂に達し、そこから下りとなつて阿倍野区周辺を経て、南部の住吉区・住吉大社

付近に至り、その辺りでほぼ平地になり清水丘を以て終わり、長さ約十二キロメートルに及ぶ。大阪（大坂）の歴史の発祥地であり、要所です。

日本における文化と政治の中心の地位を固めつつあった大和国・河内国は、渡来人の進んだ文化の影響を受けながら、発達していききました。また、古代国家の形成の進行に伴って大王（後の天皇）の権力が高まり、政治機構も次第に充実しました。

★難波と難波津

これが、七世紀前半に至るまでの都市成立に関する一般的な情勢です。この間の難波の地域の発達をもう少し詳しく見ますと、

前述のように難波は瀬戸内海と淀川・大和川の交わる場所に位置し、その地の利から淀川の河口を利用した難波津は古くから栄えました。

仁徳天皇の難波高津宮は、上町台地の東から南にかけて、淀川と大和川の合流によって生じた大きな湖と湿地帯がありました。難波潟、河内湖と呼ばれています。上町台地の北の麓からさらに北へ砂州がのび、河内湖の排水を妨げるので、豪雨に合うと洪水が起こる。そこで天皇の詔によって

「宮野北の郊原を堀り、軟水を引て以て西海（大坂湾）に入る。因りて以てその水を号して堀江と曰う」

上町台地の北麓を東西に堀割するという大工事によつて難波堀江は成立するのです。これが現在の天満川、大川などと呼ばれる流れであることは、ほとんど定説となっています。

この堀江が難波津にもたらした最大の利益は、難波津に着いた船がそのまま堀江を通つて大和川あるいは淀川に入り、遡つて河内、大和、山背へ航行できることです。外海用の大船はともかく、普通の船は難波津で荷を積み替えることなく、そのまま川を遡ることができのです。

幾つかの伝説があります。『古事記』の仁徳天皇の条で、皇后磐之媛が紀伊国へ宴会に必要な御綱柏を採りに行き、船に積んで帰つてくると、天皇は皇后の留守の間に八田若郎女を呼び入れて昼夜に戯れているという話を聞く。皇后は大いに怒り、御綱柏を海に投げ棄てて、高津宮には入らず、「その御船を引き避けて、堀江を遡り、河に隋いて山代（山背）に上り幸す」とあります。

また、時代は下がり、九三五年頃成立した『土佐

日記』によれば、土佐から室戸岬を回航してきた外洋船が、難波津からそのまま淀川を遡つて、山崎の津に着いています。

大和川の航行については、六〇八年（推古十六）に來日した隋使の一行は難波津に泊まったのち、大和の小墾田宮に行くために海石榴市に至つています。この市の場所は大和川上流の初瀬川に近接しているから、難波から大和川を遡つたものと推定されます。

このように難波堀江の開削によつて難波津と後背地との連絡は便利になりました。しかも後背地は淀川水系と大和川水系を利用すれば畿内のほとんど全域に及びます。この利点が住吉津を圧倒したのでしょう。一九八七年の発掘で上町台地の北部から発見された十六棟の倉庫群の遺跡は、この難波の繁栄を証明する何よりの物的証拠です。

規模の大きさに加えて、整然たる配置を考えると、この倉庫群の所有者は難波地方の豪族とは思えません。このころ成立しつつあった国家の首長、すなわち五世紀後半には大和と河内を本拠地とした政権の大王が倉庫群を所有していたのでしょうか。五世紀後半という年代からすると、前述の雄略天

皇がその有力な候補となります。五世紀初めの仁徳天皇のころに着手された堀江の工事がこのころいよいよ完成して、難波の繁栄が始まったと考えられます。難波津は大和朝廷の外港として、管理されていたのでしょうか。

このように五世紀後半、難波津は大和政権の直轄の港として栄え、港の管理や倉庫の出納・警備に当たる文武官が津を中心に居住したと思われる。また、都市というには程遠い状態であつたでしょう。また、倉庫も建て替えの跡がなく、倉庫群が長期にわたつて存続したとは思えない。政変が相次いで起こり、政局が混乱していたことと関係すると考えられます。

★難波の発展

難波地域の都市的性格が進むのは、六世紀から七世紀にかけてです。それは次のような事情があります。

その一は、六世紀前半、継体天皇が現れて雄略以後の政界の混乱が一応収まり、五二八ごろ、九州北部に起こった岩井の乱を平定したこと。その結果、王権による西日本の支配が安定し、西日本

に向かつて開く難波津が一層栄えました。

その二は、四七五年、高句麗が南進して百済の都漢城を滅ぼしたことに端を発して高句麗・百済・新羅の三国間の緊張が高まり、中でも従来後進的地位にあつた新羅が六世紀に入ると国力を増強し、麗・済二国に対抗したことです。そのために朝鮮三国はそれぞれの立場から日本との友好関係を維持しようとして遣使しました。三国のうち百済と新羅の使者は難波津に入港し、日本からの使者も主として難波津から出港し、津の繁栄に貢献しました。高句麗の使は六世紀にはもっぱら越地方(北陸)に来航しましたが、七世紀には難波にも入港するようになりました。日本の朝廷はこれらの使者を宿泊・休養させるための施設として「館」^{むろつみ}を難波に設けました。外交をつかさどる役所として「大都」、内政用の「小都」を置きました。

以上、国際関係の緊張に伴い、難波に各種の政府機関が設けられ、それが難波の都市化を進める要因の一つとなつたことを述べました。

また、国際関係の緊迫が続いて、大陸への往来は増し、その多くは難波津を経由したので、街の発展は続きました。

さらに難波の都市的性格を加えるものとして寺院があります。七世紀前半、難波地域に建立された、もつとも有名な寺院は言うまでもなく四天王寺です。聖徳太子の発願によると伝えられます。渡来人が多く居住したこともあつて、大和の飛鳥斑鳩と並んで難波が仏教文化の中心地のひとつであつたことは確かです。

★難波遷都と白村江（はくすきのえ・はくそんこう）の戦い

難波は政治都市としての発展もありました。大きな政変「大化の改新」による影響は大きいです。六四五年、強勢を誇つた蘇我氏が滅ぼされ、中大兄皇子が孝徳天皇を推戴して新しい政治を始めるにあたつて、難波長柄豊碕宮に遷都がなされました。日本書紀に書かれている通り、実際に一九九三年になつて朱雀門が発見され、段々と全貌が分かつてきています。

難波はその後、大陸が強大な唐の時代となり、国際政治を行うには内陸部にこもっているより海辺に都を設け、日本一の港に都を持つていた方がよいという判断があつたと考えられます。

朝鮮半島の情勢が緊迫化してきて、百濟再興の軍が百濟遺臣たちによつて起こされ、日本の救援を求めてきました。このため、中大兄皇子以下大軍が救援に出征したのは、ご承知の通り、『白村江の戦い』で、唐・新羅連合軍に大敗しています。このとき、おそらく難波津も中心的な役割を果たしたと思われます。

こうして、大王（天皇）直属の羽曳野の常備軍は、白村江の戦いにおいて難波津から、先頭を切つて朝鮮半島に向けて出征して行つたと思われます。

★白村江の戦い

国民文化研究所の夜久正雄氏が言うように、「七世紀の日本が情誼にもとづいて百濟を援けた白村江の戦は、不幸にも、敗れはしましたが、筋を通した義戦」でした。人の国をわがものにしようとの欲望からではなく、百濟という友好国（おそらくそれ以上）を助けたいという自然な気持ち、すなわち「義」の気持ちに駆られて立つた、日本人らしい心情だと思います。

結果は、日本は敗北したものの、最も刺激を受けた新羅の国が、唐と対等に接する日本を見て、今

まで唐の言いなりだった新羅が初めて立ち上がったのです。この唐からの独立は、まさに「東アジアの大事件」であつたと、夜久氏は言います。

その心情を詩歌で表現した万葉集を経て、『海ゆかば』の歌に結晶したことは見事としか言いようがありません。「かえりみはせじ」の文言に日本人の潔さの原風景を見る思いがします。戦前、戦意高揚に用いられた経緯があり、それにより、よくないイメージを持つ人々はいるかも知れません。しかし、日本人の歴史的な流れとして見たとき、肚に落ちる気がします。

海ゆかばの原風景となった白村江の戦いに、羽曳野の古代の人たちは間違いなく、軍団として参加していた、と私は思います。あたらしい道の場は、その人々のみたまのご縁で呼び寄せられたのかも知れません。なぜなら、道友には今もこうして、日本の国を思い、天皇陛下を思う心情が湧いているからです。

★白村江の戦いが現代社会に示すもの

私は、『美しい日本の憲法をつくる国民の会』（櫻井よしこ代表）に参加しました。近年の中国の無

神経な領土拡張主義を見て、一刻も早く憲法改正を実現しなくてはならないと思っています。

ただ気になることが出てきました。日本を世界から排みに来るようになることと、この敵対関係の国防という現実をどのように考えたらいいか、ということでした。

白村江の戦いでは、一夜にして日本の大軍が消滅してしまつたのです。『蒙古の来襲』では敵の蒙古軍が神風？で全滅したわけですが、このときは反対で日本軍に神風は吹かなかつたのです。しかし、なつてきたことはすべてよしです。「大王の辺に死なん かへりみはせじ」というのです。大東亜戦争では今も、あれがよくなかつた、これがよくなかつたとの反省ばかりでしたが、昔の日本人は違いました。

この白村江の戦い以降、防人やら国防に力を入れたことを見ても分かる通り、この大戦は第一回目の「国が危ない」だったのです。明治維新が二回目、大東亜戦争の敗戦後が三回目の国が危ないです。それにしてもなぜ、白村江には神風が吹かなかつたのでしょうか。そして、大東亜戦争でも吹きませんでした。私は羽曳野の土地柄を知るにつ

れ、これは天意だつたと思われました。

日本という国は昔からバイタリテイのある国民性で、遠く海外に出て行ったり、先手を打つていく積極的な民族です。白村江の戦い当時も既に周囲から日本軍は強いと恐れられたと言います。

しかし、気がついてみれば、大東亜戦争後、世界で唯一の被爆国となり、過ちは繰り返しませぬから、と世界に先駆けて言わせられているのです。とんでもない平和憲法ですら、机上の空論を人類の理想として掲げさせられたままでいるのです。

紛争国の支援に行った自衛隊が近年法改正した途端、「なんだ、それじゃ、他の戦争する国と変わらないじゃないか」と今までの日本への尊敬のまなざしを辞めたと言ったことがあります。戦争放棄をして馬鹿な国と思われているながらも、理想を追求する尊い国とも見られていたのです。天はいずれにしても戦争は望んでいないのではないのでしょうか。一応二応で三応を悟ると言いますが、今回の昭和の敗戦は三度目の天意だつたと思います。私たち道友は、世間で理解されることがなくても何時かは分かってもらえると、「理の通りの世」の実現を目指してきたではありませんか。少しでも

もよくなるよう世間の掃除をして来ました。国防は十分行ふ必要はありますが、天皇陛下のメッセージではいつも『世界平和』を言われています。理は世界平和にあります。

天は、理のない攻撃に対しても勝ち負けの理ではなく、徳を以つて臨むという、一段高い対応を日本人に求めています。それはまず先駆けとして、道の者の果たすべき使命ではないでしょうか。今回、古代の日本を振り返って、これから日本人がどう生きていくべきか、その方向を教わった気がしました。

★元の日本に還るといふことは

元の日本に還ると言われますが、元の日本とは例えば、どういうものを指すのでしょうか。

元をたどれば、日本の神話である古事記の中にも、元の日本といえる概念があると考えられます。それは、くにゆず国譲りの物語です。

出雲の国津神の大国主命から天照大御神へ葦原中国の国を譲りを受ける話です。

そのシーンの中で、「汝がうしはける葦原中国は、我が御子のしらす国である」という意味のこ

とを天照大神の使いの者が言うわけです。

大國主命が治める葦原中國は、ウシハク國、一方天照大神はシラス國だったのです。

國を治める方法において、「シラス」と「ウシハク」という二つの古語があり、日本はシラスの國だということです。このシラスの概念は日本独特のもので、世界に誇れる日本の哲学なのです。

ウシハクの意味は、主として土地や人民を「領有」する意味で、日本以外の西洋や中国など多くの國の治め方がそうです。反対にシラスとは、國の様子を知り、國民に寄り添い、世が治まることを願う祈りという、日本の國の在り方です。

世界では今も戦争が絶えませんが、この日本の概念は、間違いなく世界を平和に、倅せに、導くことでしょう。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。
各発行月の前月15日までにお問い合わせ致します)

申込先

あたらしい道本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和7年春号

令和7年3月8日発行 (第542号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18
〒583-0872 TEL: 0729 (56) 7971

印刷所 キクイ印刷工芸社
大阪府羽曳野市古市6-12-9
〒583-0852 TEL: 0729 (56) 6881

季刊誌「あたらしい道」

令和七年春号

第542号

（2025年）

発行／一般財団法人 あたらしい道